



●発行●三重県小中学校長会 津市桜橋 2-142 三重県教育文化会館内 TEL 059-227-7011 E-mail info@mie-kochokai.com
●編集●三重県小中学校長会 広報委員会 ●印刷●光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1 TEL 0598-29-1234



校舎



私の学校づくり



自分の命を守るように

御浜町立阿田和小学校

校長 竹本 和 拡

阿田和小学校は、三重県の南端、南牟婁郡御浜町の海沿いにあり、約百四十名の児童が毎日元気に学校生活を送っています。

学校の大きな課題は、その立地条件にあります。学校の海拔は五・三メートルで、学校の両側を二本の川が流れています。東南海・南海トラフでの巨大地震が発生した場合、発生後約十分で学校に津波が到達することが予想され、学校は浸水地域に指定されています。そのため、いざという時に、子どもたちが自分の命を守るよう、防災教育に力を入れて学習を進めています。年三回、外部から講師を招聘して防災講話をしていただくとともに、防災の授業の質を高め、また高学年を中心にタウンウォッチングや防災マップ作り、ストローハウス作り等を計画的に行っています。

避難訓練では、津波を想定して約八百メートル離れた高台に避難する

ことを基本として「率先避難者たれ」「想定を信じるな」「全力を尽くせ」の三つを大切にしながら、定期的に訓練を行っています。十一月には、防災に特化した授業参観を行い、地震体験車での学習や保護者も参加しての高台への避難訓練等を行いました。高台への避難を行うためには、防災に対する知識だけでなく、最後まで走りきる体力も必要です。様々な子どもたちの活動の中で、防災学習の視点を持つように心がけながら取組を進めています。取組を進める中、子どもたちには確実な防災意識が育まれていると感じています。六年生からは防災の授業の中で「いざという時は、自分達が率先避難をする。」という頼もしい声も聞くことができます。今後子どもたちが自分で自分の命を守ることができるよう、防災教育を進めていきたいと思っています。

今日的課題の克服に向けて

全ては児童を守るために

桑名市立修徳小学校

校長 尾関 一夫



一 目的の明確化

教育現場における課題について改めて考えてみると、すべてが課題であると言っても過言ではありません。その多様な課題の解決に向けて、限られた時間の中でいかに効率的かつ効果的な取組を積み重ねていくか、まさにカリキュラムマネジメントとともに、タイムマネジメントが問われているのだと思います。今年度、本校に校長として初めて赴任し、それぞれの分掌部会を中心に課題解決に向けて様々な取組を推進してきました。しかし、その中には、「何

のために取り組むのか」という目的が不明確なものがありません。

コロナ禍において、前例踏襲では立ち行かない教育活動となり、今後の学校運営全般について学校が主体性を持つて見直すきっかけにしています。

二 教訓

間もなく、大阪教育大学付属池田小学校で起きた校内児童殺傷事件から二十年目を迎えます。児童八人の尊い命が奪われ、十五人が重軽傷を負った凄惨な事件でした。私は、池田小学校研究発表会へ赴いた際、犠牲となった八人の児童名が刻まれた「祈りと誓いの塔」を目にしました。授業で生き生きと学ぶ児童の姿とともに、防犯に対する教職員の取組意識について深く学ぶことができました。しかし、本校の不審者侵入対策は、まだまだ脆弱な体制と言わざるを得ない状況にあります。そして、二十年の時を経て、池田小の教訓が風化し、教職員に意識されていない

のではないかと危惧します。すべては児童を守るため、事件を記憶だけに留めず、常に学び、実践に生かしていくことが重要ではないかと思えます。

平成三十年には、大阪北部地震が児童の登校時刻に発生し、ブロック塀が倒壊して児童が亡くなっています。事故後、全国の学校や公共施設にある危険なブロック塀の点検を行い、一部フェンスへの改修が行われましたが、通学路にはまだまだ危険なブロック塀が存在しています。

三 命を守る実践的取組へ

本校の学校経営方針には、「安全で安心できる学校」を掲げて取組を進めています。その取組が、児童の命を守ることを想定した実践的な取組になっているかどうか、加速度的に変化する社会状況等に合ったものになっているかどうかを振り返り、見直しを図っていくことは最優先課題だと考えます。本校のこれまでの不審者侵入対策訓練は、計画段階で侵入箇所が決められているものでした。しかし今年度は、不審者が児童へのDV歴のある保護者という設定のみを知らせ、どのような行動をとるかは分からない方法を取りました。教室への侵入を阻止するための時間の稼ぎ方や児童の避難のあり方など、様々な課題が見出されました。

地域から学び、地域に誇りを持てる子どもの育成を

熊野市立飛鳥小学校

校長 榎本 雅夫



マニュアル通りでない実践的訓練は、災害時における児童の避難も同様です。校舎内の避難経路が常に行けるとは限りません。登下校中に緊急地震速報が発令されたら児童はどう行動するのか、竜巻が接近した時にはどのように身の安全を確保するのかなど、あらゆる災害や事故を想定して、その対策について更新していかなければなりません。学校だけでなく、学校に関わるあらゆる方々と知恵を出し合い、目の前の子どもが、笑顔で元気に過ごせる学校生活を保障するための取組は欠かすことができません。学校が、安全で安心して学べる場所であるという当たり前が当たり前になるよう、努めなければならぬと考えています。

た学校です。令和二年十一月現在全校児童数二十六人、一年五人、二年五人、三・四年（複式学級）七人、五・六年（複式学級）八人、特別支援学級一人を含む五学級編成となっています。

保護者・地域の方々は学校教育活動に対して、非常に協力的で、授業参観や総合的な学習の時間、生活科、各種行事に参加いただいたり、外部講師として来ていただいたりしています。

当地域は、もともと林業が盛んな地域でありましたが、年々人口が減少し高齢者率が高く、過疎化が進んでいます。

当地域の状況を踏まえ、子どもたちが地域に出て、地域の良さを知り、地域に誇りが持てる取り組みを継続しています。

一 郷土の伝統文化から学ぶ

五・六年が、熊野市の無形民俗文化財「ジャジャック」について学びました。「ジャジャック」は釣鐘と大太鼓を並べた楽器です。その楽器を鳴らし盆踊りの始まりを告げてから初精霊供養を行う伝統行事です。

子どもたちは地域の「ジャジャック保存協会」の方々に公民館で三回にわたる指導を受け、学校でも練習しました。最後にはそれぞれのオリジナル曲を作り、夏休み前に学校の

本校は、三重県南部、熊野市の山間地に位置した飛鳥町内の三校が統合し、平成二十二年、新たに開校し

近くの光福寺で発表することができました。当地域にしか残っていない伝統行事であるため、地域の保存会の方々も伝統継承に期待しています。

二 郷土の産業から学ぶ

熊野市飛鳥町の特産品である「たかな」についての学習を三・四年で取り組みました。

飛鳥たかな生産組合の方々の指導で、六月中旬に、種のまき方、その後の手入れの仕方等について学びました。種をまいたトレー一つを学校で育て、地域の方の指導を受けながら苗を育て、学級園に移植し毎日観察しながら育てました。十一月下旬には収穫することができ、約半年間にわたって地域の産業を学ぶことができました。一月下旬には「たかな漬け」生産について学習し、最後は地元の名物である「目はり寿司」を作ります。

三 地域とともに作る運動会

九月には、飛鳥小中の合同運動会を開催しています。七月から実行委員会組を組織し、学校・地域の方が合同で種目を考えます。以前は町民運動会として開催していたそうですが、飛鳥町の三校が統廃合したことを機会に、飛鳥小中合同運動会として小中と地域が合同で行っています。例年、小中学生・保護者はもちろんのこと、地域の方々や、町内の

老人介護施設の方々など多くの人たちが参加し、地域住民にとって楽しみな行事となっています。

子どもたちにとっても、日ごろ取り組んだことを地域の方々に披露し、地域の方からほめられることで、自尊心の高まりや、地域の一員としての自覚が芽生えることにつながると 생각합니다。

おわりに

地域に学ぶ学習活動や行事が年間を通じて計画されていましたが、今年度においてはコロナ状況下のため、削減せざるを得ませんでした。今後でもできる限り地域の方々から学ぶ機会を作り、児童が生まれ育ったこの飛鳥に誇りが持てるような学習を展開していきたいと考えています。



**コミュニティ・スクールを
基盤とした小中一貫教育**
名張市立桔梗が丘中学校
校長 西山 尚 吾

社会はグローバル化、情報化が一層進展し、予想をはるかに超えるス

ピードで多様化が進み、これまで以上に変化の激しい時代が訪れることが予想されています。これらの背景から、子どもを取り巻く環境も大きく変化していくものと考えられ、これからの時代を生きる子どもは、一人ひとりが多様な個性・能力を伸ばし、充実した人生を主体的にたくましく切り拓いていく力や、人となりが、共に学び合い、支え合って豊かな未来の社会を築いていく力が求められます。

名張市では、市内全ての小・中学校（十四小学校・五中学校）において、「コミュニティ・スクール」を基盤とした小中一貫教育を導入しています。子どもの育ちや学びに合った系統性・連続性のある新たな教育である小中一貫教育は、平成二十八年度から南中学校区を皮切りにスタートしました。小・中学校の教職員が互いを知り、校種の垣根を超え、義務教育九年間を意識して協働しながら指導することにより、学力向上や学習意欲の向上、中一ギャップの緩和等、児童生徒の姿の変容が見られました。他の中学校区でも順次準備を進め、本年度からはすべての中学校区で実施となっています。

また、市内全ての小・中学校にて設置しているコミュニティ・スクールでは、未来を担う子どもの豊かな

成長のために学校・地域住民・保護者が連携・協働し、めざす子どもの姿を共有するとともに、その実現のため「学校運営への参画」「学校の支援の充実」「地域貢献の場づくり」の三つを柱にして取組を進めています。その取組の中で、地域・保護者・学校の連携意識の高まり、学校が必要とする支援の充実、子どもと地域住民のつながりの深化、子どもの地域づくりへの参画、教職員の負担軽減等、たくさんの好影響・好循環が生まれています。

これからの地域を支える子どもが、小・中学生時代に地域の方々と触れ合い、様々な経験することは、少子・核家族化が進み異年齢とのコミュニケーションの機会が減っている子どもにとって、有意義な機会となっている。

地域の方々は、学校教育活動に参画し、ボランティアとして学校支援に携わることで、楽しみや、やりがいを感じています。

子どもや教職員は、地域の方々に支えられていることを実感し、感謝の気持ちを伝えることができています。卒業した子の中には、「地域の方々のように自分も誰かの役に立ちたい」「地域に貢献したい」という思いを持っている子もあり、地域行事のスタッフとして活躍する場面も

見られます。

学校という場において、このような温かな交流がもたれていることは、子どもの豊かな心の醸成のためにも地域の人のためにもとても大切なことで、コミュニティ・スクール導入による好循環であると感じています。

今後、小中一貫教育の実施とともに、地域とともにある学校づくりであるコミュニティ・スクールから子どもを核とした地域づくりである「スクール・コミュニティ」へと発展させていくことで、グローバル化や急速な技術革新に伴い予測不可能で変化の激しい時代を突き進んでいくための力を、子どもたちにつけたりつけるとともに、子ども達を持続可能な社会の創り手として育成していきたいと考えます。



コロナ禍の中での修学旅行

学校法人享栄学園鈴鹿大学こども教育学部
教授 伊東 直人

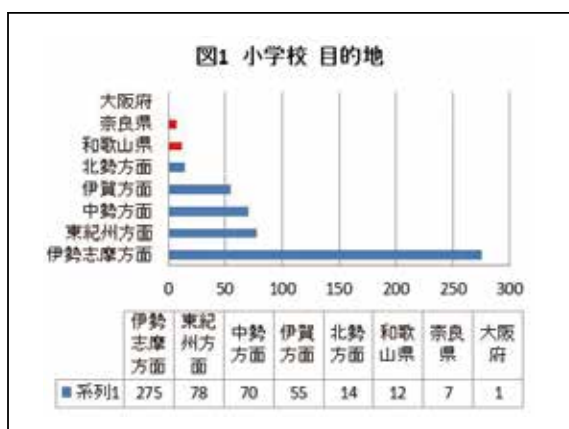
三重県小中学校長会「修学旅行実施状況調査」

鈴鹿大学子ども教育学部令和2年度修学旅行アンケートから

本稿では、多くの学校が今年度の修学旅行の目的地・宿泊地を県内に変更した点に焦点を絞り、三重県小中学校長会での調査結果及び鈴鹿大学での調査結果を俯瞰し、今後の修学旅行の在り方について考えていきたいと思います。

1 修学旅行の目的地・宿泊地（校長会調査「修学旅行実施状況」から）

まず小学校の目的地・宿泊地です。図1、2に示すように、目的地に県外（和歌山県・奈良県・大阪府）はありますが、宿泊地は全実施校が県内です。目的地・宿泊地ともに、伊勢志摩方面が多く、次いで東紀州方面が多くなっています。



次に中学校の目的地です。（調査では目的地のみの設問ですが、おそらく宿泊地も同様の結果と推測されます。）県内が76校、県外が62校となっています。県外が半数近くあるものの、当初予定の目的地として挙げられていた東京方面（当初予定101校）、九州・沖縄方面（同27校）が他の方面に変更になっています。



2 今年度修学旅行に対する児童生徒の反応（鈴鹿大学の調査から）

当調査は、鈴鹿市（小1校・中1校）、津市（小4校、中3校）、松阪市（小6校）を対象に、小学生403人、中学生625人から回答を得ることができました。

（1）小学校児童の満足度

小学校は県内を目的地・宿泊地としており、児童の満足度は、「満足・どちらかといえば満足」が96.3%（四〇三人中三八八人）でした（表1）。

表1 小学生の満足度

	満足	どちらかといえば満足	あまり満足しなかった	不満足	合計
人数	286人	102人	14人	1人	403人
割合	71.0%	25.3%	3.5%	0.2%	100.0%

「満足」と答えた児童では、「三重県のことがよくわかって楽しかった」「体験学習が多く楽しかった」「友達といっぱい楽しめたからよかった」などの理由が多かったですが、「どちらかといえば満足」の中には、「行けたのはよかったが、やっぱり金閣や銀閣を見たかった」というような理由が多く見られました。

（2）中学校生徒の満足度

中学校は「目的地・宿泊地が県内」、「県外」に分けてまとめました（表2、3）。満足度のうち、「満足」と回答した生徒を比較すると、目的地・宿泊地が県内の学校は55.5%で、県外の学校は67.4%と、違いがみられました。「どちらかといえば満足」まで含めると、県内の学校は94.7%、県外の学校は98.0%と大きな差は出ていません。

表2 中学生の満足度 目的地・宿泊地が県内

	満足	どちらかといえば満足	あまり満足しなかった	不満足	合計
人数	180人	132人	22人	3人	337人
割合	55.5%	39.2%	6.5%	0.9%	100.0%

表3 中学生の満足度 目的地・宿泊地が県外

	満足	どちらかといえば満足	あまり満足しなかった	不満足	合計
人数	194人	88人	5人	1人	288人
割合	67.4%	30.6%	1.7%	0.3%	100.0%

調査をお願いした中学校のうち目的地・宿泊地が県内になった学校（2校）は、当初の計画では、沖縄県を二泊三日で訪問する予定でしたが、三重県内一泊二日に変更をしています。沖縄県から三重県内、さらに日程短縮という中で、「満足」と答えた生徒からは「行き先とか関係なくみんなで行けたから楽しかった」「先生たちが十分考えてくれて、今まで行ったことがないコースがありとても良かった」「三重県でもこんなに

楽しめる」という理由が多かったですが、「どちらかといえば満足」と答えた生徒の中には「県内でも二泊三日で行きたかった」「三重県もよかったけど、ほんとは沖縄に行きたかった」といった本音や「遊び要素的には満足でしたが、学習要素的には不十分だったと思う」という意見もありました。

3 これからの修学旅行に向けて

調査を通して、「行けて良かった」「行って良かった」という声が校長先生方からも児童生徒からも聞かれ、『良かった』という評価ができると思います。しかし、もしも来年度も同じ状況で、県内を選択せざるを得なかったらどうすればいいのでしょうか。

教育研究家の妹尾昌俊さんは、『修学旅行を通じて、どんな問いを子どもたちが立てて（教師の支援もありつつ）、探究しているのか、そこが問われていると思います』とコロナ禍での修学旅行でありながらも、厳しい意見を述べられています*1。確かに、今年度は、様々な課題を調整し、「とにかく行けてよかった」と

いう状況だったと思います。しかし、仮に目的地が県内であったとしても、今後は「とりあえず行くことが目的」ではなく、「目的をもって行く」ことが必要なのかもしれません。“伊勢志摩の魅力を見つけて発信しよう”“コロナ禍でも安心して人々が伊勢志摩に来てくれるような観光戦略を立てよう”など、今年度実施した経験を土台にして学びのプロジェクトを加味した計画（PBL）を立てていくこともアリだと思います。

“非常事態”が“非情事態”にならないように、校長先生を中心に先生方が苦勞され続けた一年だったと思い、頭が下がります。そうした姿を児童生徒もよく理解し、すべての教育活動に対する先生方の熱い思いを受け止めているはずです。

本稿を書いている段階では、今後実施予定の学校もあります。なにより全学校が無事に実施できることを祈ります。

*1 「思い出づくりのためだけなら、修学旅行はいらない コロナ禍で修学の意味を問いなす」妹尾昌俊 令和2年10月1日 (<https://news.yahoo.co.jp/byline/senoomasatoshi/20201004-00201414/>)

本部役員だより

新たな学習スタイルの確立を目指して



三重県小中学校校長会

中学校部会長

小林 弘明

令和二年三月新型コロナウイルス感染症拡大防止のため臨時休業が開始されて以来、学校の日常生活は大きく変わりました。感染予防対策をとりながらの学校生活は、今までの常識が通用しない新たな学校様式となりました。学校行事や各種体験活動の見直し、特に修学旅行においては度重なる日程や行き先変更を余儀なくされ、その都度新たな決断をしなければなりませんでした。

また、学習活動においても、これまで進めてきた授業改善の取組を止めないための工夫が各校で行われました。

私たちは今一度、原点に立ち返り、それぞれの教育活動の在り方について見直す必要があります。

新学習指導要領の「未来の創

り手となるために必要な資質・能力を育む」という理念を実現するためには、カリキュラム・

マネジメントによる「社会に開かれた教育課程」の創造、「主体

的・対話的で深い学び」の実現に向けての授業改善、「GIGA

スクール構想」により整備されるICT教育の充実、そして、

今年度から時間外労働時間の上限が法令化された「働き方改革」

の推進、これらの取組は必要不可欠になっていきます。

今こそ、各校長は自らの学校の新たなグランドデザインを描

き、新たな学校づくりに取り組んでいかなければなりません。

三重県小中学校校長会では、令和三年度「小中学校教育の充実

発展に関する施設並びに予算」について学校経営委員会が中心となり、各郡市校長会からの要望をもとに、県教育委員会や県議会に要望活動を行いました。また、「働き方改革の現状と今後の展望」について、全校長に実施したアンケート結果をもとに、県教育委員会と特別委員会との懇談を行い「子どもの教育の充実・達成感」をどのように実現するか校長と県教委、それぞれの役割について話し合いました。

我々は、教育現場の声を県教育委員会等教育機関に届けるとともに、協議したその成果と課題をそれぞれの郡市で共有することにより、諸課題の解決に向け取り組んでいかなければなりません。

三重県小中学校校長会は、組織力を生かし連携・協力していくことにより、一人一人の校長の不安や心配を、安心や自信に変えていけるよう、会員の皆様とともに取り組んでいきたいと思っています。

これからも三重県小中学校長の会の諸活動に、ご理解ご協力をよろしくお願いいたします。

私の薦める一冊

子どもの「できる」を増やす

四日市市立内部小学校

校長 松岡佳代



私が新採の時に経験した話である。小学四年生のある男児が、残りで図工の版画をしていた時、帰るのを拒否し、どれだけ説得してもその場から動かないので、母親に迎えに来てもらったが、「帰らない」との一点張りだった。結局力ずくで帰すことになった。なぜ帰りがたがなかったのか：あらゆる理由も当てはまらず、不思議で仕方がなかった。

今では様々な研修会や専門家の方々に話を聞いて、発達障害の子どもたちへの対応についての知識を持つことができるようになったが、依然としてうまくいかないことも多い。

今年に入り、特別支援教育に詳しい教頭先生に薦められた本が「発達障害の子どものできるを増やす提案・交渉型アプローチ 叱らないけど譲らない支援」である。この本のおすすめポイントは専門用語

語が少なく、また、具体的なアプローチの仕方がイラストで描かれていたり、よくあるケースの具体例が載っていたり、またその分析がしつかりされているところである。

読みながら、このケースは〇〇に当てはまるな、このケースは・・・というように、今現在、教室での困難さを抱えている子どもに試してみたい内容がたくさん掲載されている。教師が困っている子は、子ども自身が困っているのだということを再認識させられた。本校でもこのアドバイスを基に、数名の子どもと「できること」を目標にして、毎日、毎週、毎月（個人によって異なるが）校長室で振り返りを行っている。どの子も、その目標を達成することに重点を置いていたので、叱られる回数が減ってきた。子どもの気持ちに寄り添いながら、具体的に提案をし、自分で選択させると、少しずつではあるが変化が感じられるようになってきた。その子に寄り添い、的確な言葉がけをすること：そのことが一番大切であると気づかされた。

新採の時の男児は四十代半ばになっっているだろうか。あの時つらい思いをさせてしまったことを今でも後悔している。これからも愛情をもって子どもたちと関わっていききたい。

随想

言葉の力

いなべ市立山郷小学校

校長 山下秀人



学校再開後の六月、一年生が「校長先生はいつも元気やね。」と、こり。十二月、一年生が「校長先生、〇〇さんがサンタはいないって言うけれど、いるよね?」とほっこり。

教職生活をふり返ると、いつも子どもたちの言葉や姿から元気や夢をもらってきたと実感します。教職生活初めての通知表所見。一つ一つの言葉に責任を持ち、自分が評価することの重みを感じた一年目。初めての六年生担任をし、無我夢中で迎えた卒業式。子どもたちの姿に感動し涙した二十代。

二校目の赴任地では、地域の椎茸栽培農家の学習。椎茸がきらいだった子どもが、農家の努力や工夫を学び、椎茸のフライを食べて「少しだけ好きになりました。」と感想に。地域学習にのめり込んだ三十代。三校目では、蛍の観察、人工飼育にチャレンジ。自然の用水で

蛍の幼虫を発見した時の子どもたちの歓声。幼虫の上陸や飛翔等の自然観察で一年に長靴を二足も履きつぶし、環境教育に没頭した四十代。成人式で、タイムカプセルを開けた時の教え子たちの笑顔と会話に、当時の思い出が鮮明に浮かんできました。

十月に、五年生が、総合学習で、働く人々へのインタビューを実施。「校長先生の仕事は?どんな時がうれしいですか?」等々真剣にメモを取ってくれました。校長としての七年間、どうだったのかと自問自答する機会を子どもたちに与えてもらい、あと半年、職責を果たすようにと背中を押されました。

言葉には、喜びを与え、人を励まし、動かす力があります。これまで出会った多くの子どもたち、教職員や保護者、地域の方々の温かい言葉のおかげで、今があります。わずかながらなってきた校長の挨拶。言葉を運び、一言一言に、思いを込めたいと思います。そして、私にとって最後となる卒業生に、式辞を語れることを幸せに思います。「言葉の力」で、支えてもらったことを肝に銘じ、喜びを与えられる地域人になれるように、学び続けたいと思います。今日まで支えていただいたすべての人に、心の底から、「ありがとうございました。」

今、思うこと

四日市市立三滝中学校

校長 山下博



三十六年前に赴任した中学校で、校長として最後の年を迎えようとしています。そして、本校での駆け出しの九年間は、今も私の心にしっかりと刻まれています。

英語科教員として、「英語なんかきらい」と学ぶ前から訴えてくる生徒に対して、店の紙袋や街の看板、音楽や映画など少しでも使いたくなるような英語を毎時間紹介しました。単なる意地でしたが、一人の保護者が「商店街で流れていた英語の歌を子供が自慢げに『これ知ってる』と英語で題名を教えてくれました。」と伝えてくれた時はうれしかったです。

私が当時いくつか体感した、わかる授業づくりのための入り口は、今も先生たちにこだわって伝えていきます。

先輩の先生方にも大変お世話になりました。授業や行事の進め方、ノート指導や通信の書き方、一番大切な生徒と向き合う姿勢まで、決して答えを教えてくれたわけで

はないのですが、たくさんさんの技を見せてもらいました。

学力が厳しく問題行動の多い生徒への家庭訪問の度に、保護者から私の姿勢や指導の甘さを指摘され、落ち込んで帰ってきた私の愚痴を真剣に聞いてくれた先輩たちの姿は今も私の目標です。

極めつけは初任時の校長先生。お酒を飲むといつもご機嫌でしたが、ある時、「お前、あいつとよう向き合ったな。母ちゃんも褒めとったわ。」とお酒をつぎながら話してくれた時、すごく報われた気持ちになりました。

この経験は、地域の様子が全く違う次の赴任校の七年間でも確実に私の教育活動の原点として生き続け、様々な生徒や職員と向き合えることができました。

確固としたビジョンやマネジメントが生徒や職員を守ることを知った教育委員会での十三年間を挟んで、私は今ここにいます。果たして、私の姿勢は、生徒や職員にどう映っていることでしょうか。甚だ怪しいですが、あと少し、自分が体得したことを彼らに伝えていきたいと思っています。



あの時、あの人

「私が後押しするよ」

伊勢市立四郷小学校

校長 深川 昭久



平成七年度末、校長先生から内々に新年度の研究主任を頼むという話がありました。当時の勤務校玉城町立外城田小学校は二年間の県の研究指定（社会科・生活科）と研究発表会を終えたところでしたが、授業研究の楽しさを感じていた私は、この機会に二年間の研究を深めて、また研究発表会を開きたいという思いが湧き上がってきました。そこで、隣クラスの松本敬子先生（元校長 現玉城町学校経営アドバイザー）に、その思いを話すと、「ふかちゃん、やりたいなら、私が後押しするよ。」という心強い言葉をいただきました。松本先生の指導力は抜群で見識豊か、そして授業の実践家として知られた方です。松本先生から、そう言っていただけならと心を決めました。

新年度になり、「一年目、二年

目は授業公開会を行い、三年目には理論を整備した大きな研究発表会を行う。どこの指定も受けず学校の自主発表で行う」ことを骨子にした研修計画を全体研修会で提案しました。想定していましたが、強い反対意見が出ました。事前に、松本先生から「反対意見は必ず出る。引いたらいかんよ。出された意見は研修委員会に持ち帰って、考えたらいい。」とアドバイスを受けていました。研修委員会で、提案の骨子を変えずに改良案を練り、全体研修会に提案。また、いくつかの指摘を受け、研修委員会で改良案を練り、全体研修会に提案。これを何度か繰り返し、厳しい意見を出していた先生から、「全体研修会の回を重ねる度に補強した提案が出てきた。根負けしたわ。」と言われ、漸く全職員同意のもと、研究を進めました。

松本先生には、研究の後押しのみならず、実践や理論、運営等で、私の思いや考え以上に見事に具現化して支えていただきました。

そして、外城田小なりの授業をつくることができました。

この経験から、私は教員として成長できたと思っています。松本先生をはじめとする外城田小の仲間、改めて感謝いたします。

「私の責任」

伊賀市立上野南中学校

校長 五百雀 豊



令和二年度は、新型コロナウイルスの影響で、正に『波乱』という言葉がぴったりの年でした。一学期中は、学校行事の中止か延期かを議論し、生徒や職員の感染予防対策の検討など、例年には無い対応に追われました。四月に新任校長として着任した私にとっては、判断と決断という重い荷物を、常に両肩に担いでいる思いでした。

二期には、新型コロナウイルス感染拡大に注意を払い、何とか学校行事を実施することができました。しかし一方では、誰もがコロナウイルスに感染しても不思議ではない状況でありながら、感染者や感染地域等に対する、誹謗・中傷や差別などがあります。そこで二期期の人権学習は、『新型コロナウイルス』に視点を当て、各学年の取り組みを進めることになりました。そのような中で、思い出

した事がありました。

今から二十五年前私は、特別支援学校から名張市内の中学校に転勤となりました。そこで初めて、人権学習を行うことになり、何をどのように教えてよいかわかりませんでした。私は、藁をも掴む思いで地元の人権センターへ相談に行きました。対応していただいた館長さんは、驚いたことに私の中学校時代の教頭先生でした。私は、事情をお話しし、何か良いアドバイスがないか伺いました。館長さんは、「あなたが苦労されているのは、当時の私達の責任です。もっとしっかりと人権について教えていればこんな思いをさせることも無かったのに。申し訳ない。」とおっしゃったのです。

現在コロナ禍の中で、感染に対しての不安や心配は、生徒も職員も感じていることだと思います。そして、この状況がいつまで続くのか予想もつきません。しかし、この様な状況だからこそ、突然現れた様々な試練や難題に出会った時、その事実に向かって向き合い、正しく対処できる力を持った子どもを育む必要があると思います。私は、改めて館長さんの言葉の重みを感じ取り、自分の責任を果たしていこうと考えています。

地区校長会だより

鈴鹿市小学校長会

「課題解決のための共通理解を大切に」

鈴鹿市には、三十校の小学校があり、近鉄名古屋線・鈴鹿線、伊勢鉄道、国道二十三号線沿線の臨海部で人口が集中している地域には規模の大きな学校が集積し、鈴鹿山麓の中山間地等では小規模な学校が立地しています。市立小学校の児童数は、平成二十一年度の一萬三千人をピークに減少傾向となっており、令和二年度五月一日現在、一萬七百四十九人となっています。

令和二年三月に、鈴鹿市は令和五年度までを見据えた新しい「鈴鹿市教育振興基本計画」を策定しました。「鈴鹿を愛し、子どもの学びと安全・安心を支え、絆で育む鈴鹿の教育」の基本理念のもと、「自己実現と人との協働により、豊かな未来を創る力を備えた鈴鹿の子ども」を育むことをめざしています。各小学校は、めざす子どもの姿を実現するために、地域や児童の実態を踏まえ、創意工夫ある学校経営を、学校運営協議会での熟議を重ねながら進めています。

鈴鹿市小学校長会の活動の多く



は、幼稚園長会、中学校長会とともに、鈴鹿市幼小中学校園長会として行っています。年八回開催される定例校長会・鈴鹿市幼小中学校園長会の後、自主小学校長会をもち、課題等について意見交換を行い、共通理解を図りながら課題解決に向けて取り組んでいます。特に、今年度は新型コロナウイルス感染症予防に伴う臨時休業中の対応や、修学旅行等学校行事の見直しについて、本年度鈴鹿市に導入されたクロムブックのグーグ

鳥羽市中学校長会

ルフォームも活用して、各校の状況を共有しながら進めてきました。このように、日々の学校運営で悩んだり判断に困ったりした時、小学校長会のよき仲間の存在が大きな支えとなっています。

鳥羽市は、伊勢湾口の島々や太平洋に面した南鳥羽地区など、「伊勢志摩国立公園」でも特に風光明媚な国際観光都市です。そこに中学校は神島小・中学校を始めとして、笠志中学校、鳥羽東中学校、加茂中学校、長岡中学校と五つの中学校があります。それぞれの校

区の特徴を生かしながら、鳥羽市教育目標「自ら学び心豊かにたくましく生きようとするとする人間の育成」の実現に向けて、校長会が一枚岩になり取り組んでいます。来年度、鳥羽市の総合計画、教育大綱、教育ビジョンが新しくなります。これについてもチームで実践していこうと話合っています。月に一度の定例校長会は小中学校合同で実施しています。教育長と学校教育課長による所管事項などの説明、外郭団体の要請事項の検討、県校長会理事と各種団体の報告の後、小中部会に分かれ情報交換などを行います。特に今年度はコロナ対応に迫られました。行事、各家庭との連絡方法、集配物

の確認方法など、例年になく話し合う時間を取りました。

毎年、夏季休業期間には研修会を実施しています。今年度は、新しく完成した市の水産研究所の見学と、海洋教育の推進について職員の方にお話を聞かせていただきました。市が進める海洋教育に、学校としていかにかわっていくべきかという観点において非常に参考になりました。

鳥羽市にも、三重県南部地域がどこも抱えている問題である生徒数の減少による学校統廃合・部活動の存続、防災教育、ミドルリーダールといわれる年代の教職員数不足があります。今後、更に学校統合が進んでいく計画があり、市全体での交流学习や生活の約束も考えていこうと動き始めているところです。



編集後記

日毎に陽が長くなり、春の兆しも随所に見られるようになりました。学年末にあたり、卒業式の準備や今年度まとめとして新年度に向けた学校体制づくり等に、大変お忙しい日々をお過ごしのことと思います。さて「校長会みえも年三回の発行を無事に終えることができました。これもひとえに、多忙な中での原稿執筆や執筆者への原稿依頼等、ご協力いただきました皆様のお陰と深く感謝申し上げます。

今年度はどの学校でも新型コロナウイルス感染症の影響により、今までにはない学校運営が求められた一年でした。特に、子どもたちの健康・安全を守るため、新しい生活様式を定着させ、感染防止対策を徹底してきました。また、学校行事や教育活動、会議、研修等について開催の決断を迫られる場面も多々あり、ご苦労されたことと思います。一方そんな中、過重労働の解消や学力向上への取組等、今日的な課題についても校長のリーダーシップのもと教職員一丸となって取り組んできたことと思います。来年度につなげるためにも是非、成果と課題を明らかにしていきたいと思います。

最後になりますが、来年度から年二回の発行になります。今後も会員相互の情報交換をはかり、さらなる校長会組織の充実に役立つ会報となるよう、紙面を刷新し充実を図っていききたいと思います。引き続きご愛読いただきますよう、よろしくお願いたします。